

医療タイムス

週刊医療界レポート

2010.12/6 No.1992

特集

医薬品医療機器総合機構

PMDAを知る3つのキーワード セイフティ・トライアングル、レギュラトリーサイエンス、そして…



タイムスインタビュー

医師の負担軽減に貢献する医療クラーク
加算は“補助輪”、体制作りが急務

東京医療保健大学医療情報学部
医療情報学科助教

瀬戸僚馬氏

グラフ北から南から No.235

医療法人千徳会
桜ヶ丘病院
(和歌山県有田市)

冬の時代の診療所経営 第9回

医聖・関寛斎の志に学ぶ診療所経営

(その1)



医療法人社団裕和会理事長
長尾クリニック院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業。尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。尼崎市医師会内科医会前会長。医学博士。著書「町医者力」「バンドラの箱を開けよう」(エピック)「在宅療養を支えるすべての人へ」(共著、健康と良い友だち社)など

HP <http://www.nagaoclinic.or.jp>

ブログ <http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>

関寛斎という江戸末期～明治期(1830年～1912年)に活躍した医師をご存じだろうか。司馬遼太郎氏が講演の中で「最も尊敬する医師は関寛斎である」と述べている人物だ。私自身、開業医になって16年。本稿の主題である診療所経営の肝は何かと問われたら、「テクニカルな問題よりいかに初心を貫けるか」「医師の志を高く保てるか」にあると思うのが正直な感想だ。関寛斎が歩んだ医道をたどってみると、現代医療事情との相似性にただただ驚くばかりだ。今回から2回、関寛斎に学ぶ診療所経営を考えたい。

寛斎は現在の千葉県東金市に生まれ、18歳の時に佐倉順天堂に入門し医術を修業。その後、千葉県銚子で医師(蘭学医)として開業をしたが、江戸の西洋種痘所(現東京大学医学部)で予防法を学び、銚子の町のコレラの流行を食い止めた。その後、寛斎は長崎のオランダ人軍医ポンベのもとに遊学。当時最高級の西洋医学知識を銚子に持ち帰った。医院は大繁盛し、全国から医学生が学びにやってきた。しかしその後銚子を去って、阿波(徳島)に向かい、阿波・蜂須賀家の典医となった。1868年に戊辰の役が始まり、蜂須賀茂韶は討幕を目指し官軍への参加を決意。寛斎は軍医として従軍し江戸入りし、そこで官軍の野戦病院を開き運営に奔走した。

雨の中での戦いとなった上野彰義隊の戦闘(上野戦争)では破傷風が多発したが、西洋医学を学んでいた寛斎はその治療で大きな役割を果たし、特に薩摩藩邸での治療に対しては西郷隆盛も高く評価し、その後の奥羽戦線では官軍の奥羽野戦病院長となった。この野戦病院での医療活動の中で寛斎は「敵味方、戦闘員と非戦闘員の区別なく平等に治療を施すように」との指

示を出し、この行為は日本の赤十字事業の先駆けだと言われている。どこか「新型インフルエンザ対策」を連想させる。

徳島に戻った寛斎は、徳島の医療レベルの向上を目指し徳島藩医学校と徳島病院を創設し、藩医学校の一等教授と医学校治療所長、そして徳島病院長に就任した。その後、医療経営の研究のため全国を駆け巡り医学校、病院の発展のために尽力をし、甲府山梨病院長に着任。この時期に、寛斎は山梨に検梅制度を普及させ、種痘所を設置し、山梨の各地域と山梨病院との交流を通じて地域全体の医療レベルアップを目指した。これは現代で言えばまさに「地域医療連携」の実践だ。43歳で再度徳島の地に戻り、現在の徳島市中徳島1丁目で開業。この後の約30年間、富裕層には莫大な治療費を要求する一方、生活困窮者に対しては無料診療の上、生活費の援助までを行うという社会事業にも取り組んだ。まさに「赤ひげ」でもあった。

1875年43歳時には「養生心得草10か条」を徳島新聞に発表し、その中で「一養生 二には運動 三葉…」と述べている。養生とは食生活と健康管理を指し運動により心身を鍛え、薬とは疾病が発生した時点で適切な医療処置を行うことを提唱した。これは、まさに現代における「メタボ対策」そのものであり、「生活習慣病診療」のお手本だ。(次回に続く)